

歴史資料館だより

聖隷グループ第5回 キリスト教信徒交流会について

社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団 理事 種谷啓太

二〇一五年一月二四日土曜日に浜松市の聖隷学園内にて「賛美を通して、神様の恵みに応える」をテーマに聖隷グループ第五回キリスト教信徒交流会が開催され、神戸聖隷福祉事業団が幹事法人として企画実施を担当させていただきました。

当日の交流会では、日本基督教団神戸聖愛教会の小栗献牧師より、「もっと賛美歌を知ろう」と題してご講演いただきました。「我々が歌うというのは神様から与えられた息を神様に返すこと。(中略)自分のなかにある空虚さ、何もなさを感じるこの空っぽな自分を通り抜けた風が、音を鳴らす。歌になる。賛美歌というのは誰かのなかを通り抜けた風、息ではないか。信仰をもって返した生き様がこめられていた。嬉しいうた、悲しいうた、叫びであるかもしれない。歌は人生そのもの。賛美歌をうた

うときに深い共感があるのはそのためではないか」と賛美歌についてわかりやすくご解説くださいました。目からうろこが落ちるとはこのこと、大変楽しく聞かせていただきました。このご講演の後半



小栗 献 牧師

では、参加法人より出された代表的な賛美歌について、それぞれの原詞(英語)と小栗先生自ら訳してくださった日本語訳とともに、ていねいな解説をしていただきました。賛美歌に祈り(思い)や宣教(メッセージ)がある。大切に楽しく歌わねばと思つた次第です。そして、各法人より代表的な賛美

発行者 聖隷歴史資料館

〒四三三-八五五八
浜松市北区三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学五号館一階
TEL 〇五三(四三九)三四〇七
FAX 〇五三(四三六)五三五五

歌についてご紹介いただいた後、皆で賛美歌を歌うというプログラムでした。賛美歌にエピソードや思いが込められていること、ずっと歌い継がれていること(旧賛美歌が多かった)、自分たちで賛美歌を作っている法人もあること、皆さんの軽妙なエピソード紹介の中に深いものを感じました。それぞれの法人の歴史の長さや重さに触れたように思います。奏楽の途切れることのない和やかな雰囲気の中、小栗先生のお話にもあつたとおり「歌うことは一人ではないことを確認すること」、「賛美歌のもつ力によって、参加された皆さまが一体となり、ゆたかな交わりのとよとなつたのではないかと思います。

日本の人口に対して、法人内でも、どこでも一〇〇分の一の比率のクリスチャンの働きは、ひとつの指針となり続けたい、磁石のように絶えず方向を見極めたい、そういうものだと感じています。大きな船の方向を決めるのは小さな舵だと聞きます。

神戸聖隷福祉事業団を生み出し

◆聖隷歴史資料館

開館時間のご案内◆

平日(月～金)の二〇時～七時
(入館は二六時三〇分までに
お願いいたします)



神戸聖隷主催で34年続いている「おいでやすカーニバル」の様子。地域の方々と連携しながら企画運営し、今年度は1,500名ほどの来場者がありました。



信徒交流会当日の会場の様子。小栗先生はリコーダーについても研究をされており、ご講演のなかで演奏もしてくださいました。

インド聖隷希望の家・ ブラジル希望の家とのつながり

インド聖隷希望の家のヴァルゲ
ーゼ・アブラハム氏より、折りに
ふれてあたたかなメッセージを頂
いております。今回はその一部を
ご紹介します。

「さまざまな障がいをもった
人々やお年寄りを元気にさせるこ
と、そして地域社会の発展に貢献
できたことに対して、インド聖隷
希望の家の私たちの心は、達成感、
手応え、そして満足感という全て
の喜びに満たされています。(中
略)私たちの社会で、多くの恵ま
れない人々の生活をすばらしく変
化させてくださる皆さんのご支援
に感謝申し上げます。神様は私た
ちが事業を始めてからずっと祝福
してくださいます。」(原文は英文)

聖隷学園では、夏期教職員研修
会とクリスマス礼拝において献金
を実施し、定期的に一〇二名の教
職員をインド、ブラジル両希望の
家に研修派遣しています。また、
聖隷クリストファー中・高等学校
では、生徒・保護者がTシャツを
寄付するなど交流が続いています。

ブラジル希望の家は、今年四五
周年を迎えますが、希望の家があ
るサンパウロ市は、昨年に続き大
変な水不足となっており、断水、

停電、雇用等、社会全体に与える
影響はひじょうに大きく、現在も
深刻な状況に直面しているとのこ
とでした。

インド聖隷希望の家・ブラジル
希望の家両施設は、ほとんど公的
補助が受けられない国情のなかで、
知的障がい者のために幾多の困難
を乗り越え、キリスト教社会福祉
を実践してこられました。そして、
その姿に聖隷の原点をみることで
できます。毎年お送りする献金は
ひじょうに大きな助けとなってい
ると伺っています。共に支え合い、
つながり、受け継いでいくことの
大切さを再確認しています。



インド聖隷希望の家での教職員研修(2013年)



ブラジル希望の家 新施設竣工式(1976年)

長谷川保 講演の足跡調査

(後半①：一九七六年～一九八〇年)

「歴史資料館だより」一二号で
は、一九六五年から一九七五年ま
での長谷川保の講演の足跡につい
て報告いたしました。本稿では、
一九七六年から一九八〇年までの
五年間についての一三六講演につ
いて調査し、依頼先の教会等より
頂いた一五件の回答資料をもとに、
その足跡の一端を辿りたいと思ひ
ます。

一九七六年七月二五日、日本イ
ース・キリスト教団柏原教会(大
阪市)において、特別集會が開催
され、長谷川保が講師として招か
れたことが、同教会より送付いた
だいた記念誌により確認できまし
た。この特別集會においておこな
われた礼拝説教および講演資料
(カセットテープ)は当館での所
蔵が確認でき、今回あらためて関
連資料を調査しました。講演では、
「ヨハネの第一の手紙三章一三節
「一八節」から、「私たちは、言
葉や口先だけではなく、行いと真
実をもって愛し合おうではありません
せんか」と長谷川保は語りかけま
す。そして、老人福祉法制定のモ
デルとなった特別養護老人ホーム
「十字の園」(一九六〇年設立)
の開設に尽力されたドイツ人デイ

アコニツセ、ハニ・ウォルフ姉妹
について触れています。「日本の
老人を救ったのは、ドイツ人の一
人のクリスチャン信徒であること。
自分だけ平和な生活をしていれば
よいのではない。ドイツ人の一人
のクリスチャンが日本の寝たきり
老人を救ったという歴史。我々は
これを捨ててはならない」と述べ
ています。また、一九七八年の米
国視察において、日本の老人の自
殺率が世界一であり、その理由が
経済的な問題よりも「孤独死」や
「将来への不安」によるものであ
ることを知り、老人ホームの建設
を進めたこと、さらに、その後の
国民の生活水準が向上し「個人と
して尊重され、生命自由、幸福追
求に関する国民の権利について、
最大の努力をしなければならな
い」と、さらなる施設の充実を囑
つていくことを決意し、有料老人
ホーム建設に着手したことなどが
語られています。

この時期の長谷川保の講演では
「老年の危機と諸問題、老人問題
とその対策」「老人問題の解決に
なくてはならないキリスト教」な
ど、「老人問題」を多く取り上げ
ています。教団、宗派を問わず、

聖書のいじりば 「神の道は完全」

学校法人 聖隷学園 宗教主任 永井英司

「遠州の空っ風」と言う言葉がある。ここ三方原台地に吹く強くて冷たい空っ風は、道行く人々の背を丸く曲げてしまふ。

聖隷クリストファー大学に隣接する聖隷三方原病院と聖隷予防検診センターの間の小径を浜名湖エデンの園へと進み、左へ曲がり下って行く。三方原ホテルホームや浜松ゆうゆうの里へと続く小径の途中に、ご存じの通り「恩賜記念館跡公園」がある。

地形からか、ここだけは風の影響が少なければかりか、その陽だまりは格別である。小さな花壇には水仙がまるで春を先取りしたかのように咲き競っている。

そのような花々の脇に目が行った。ここは余程の沃土なのであるか。何とそこには、によつきりと地面から頭を擡げた福寿草が花開いているではないか。福寿草は多年生で早春に花を咲かせるために、花が終わった後は次の年の春まで土中で過ごすとか。中学生の頃に教わった「踏まれても、踏まれても、強く野に咲く福寿草」という言葉が甦ってきた。

く中で、身近にあるものをさまざまに譬として用いながら人々に教えを宣べ伝えていった。「山上の説教」と呼ばれる一連の教えの中で、イエスは「野の花がどのよう

に育つか、注意して見なさい。云々」とお語りになった。もちろん、イエスは旧約聖書の教え（イザヤ四十章六節）に依拠しながらも、それらの教えを止揚するかのように「神の道は完全」（詩編

十八章三十一節）であること

を語り告げてくださった。この「神の道は完全」という言葉は、先達たちが活動の基とし、今日の私共も継承する「隣人愛の実践」（マタイ七章十二節）のことであり、また先達たちが日々



全国各地に伝道していたことも今回あらためて確認することができました。高齢化社会の到来を予測し、有料老人ホームの先駆けとなる高齢者世話ホーム浜名湖エデンの園を開園、そして峯真理子姉妹をはじめとする前出の柏原教会の方々が中心となり、特別養護老人ホーム宝塚栄光園、高齢者世話ホーム宝塚エデンの園の開園にいたるのです。

一九七六年九月三日、長谷川保は七四歳の誕生日に念願であったブラジルへの渡航を果たしました。一ヶ月間、ブラジルの日本人教会を歴訪し、約三〇回の説教や講演を行っていきます。サンパウロ市では、市川幸子氏により設立運営されていた「ブラジル希望の家」に訪問し、希望の家のおかれている状況が、初期の聖隷と似ていることに心動かされ、一億円の募金活動を行うことを決意しました。しかし、オイルショックの余波を受け、約四〇〇万円ほどしか献金は集まらず、一九七八年、過労により倒れ右目を失明しました。ドクターストップでどこへも外出ができない状況のなか、長谷川保は豊橋市での礼拝説教に向かいました。「約束の時間に間に合わない事態ができたとき、それでも約束は命をかけて守るものだと思えられた強い記憶」があると、シオンキリスト教会（旧イエスキリスト教会豊橋教会）の鈴木貞男氏は当

時の講演を回想されます。（鈴木氏のご子息、ご息女は長谷川保の講演を聴き、その後、浜松衛生短期大学へ進学、看護師となられたそうです。）また、ブラジルへの献金は、当時の聖隷福祉事業団にて苦心の末に不足分を用意、約束どおり一億円が送金されました。こうして、ブラジル側で集めた資金、日本政府の補助金等を合わせて、新施設の建設という願いがかなえられたのです。

一九七九年七月一四・一五日には、東栄教会（愛知県北設楽郡）の伝道集会に赴きました。故中村一夫牧師夫人、中村いく様からは、次のようなお話を伺うことができました。故中村牧師は、長谷川保に大変敬意を寄せており、東栄町内の家々を回り、保氏の自叙伝『夜もひるのように輝く』を皆さんに紹介されたのだそうです。（講演資料をご提供くださいましたご子息は、現在、聖隷浜松病院に勤務されています。）

土佐嶺南教会（高知県南国市）鍋谷仁志牧師からは、「（現在）開拓伝道を進めている中で、教会に併設した高齢者施設の建設という幻を与えられており、（聖隷の）先達に、また現在の姿に、学びつつ歩んでまいりたいと願っています」とのお言葉をいただきました。長谷川保の伝道が現在でも各地に息づいていることがうかがえます。

長谷川保聖書研究

マタイによる福音書第五章七―十二節

九節、「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。」「平和」というギリシヤ語は「エイレイネイ」という言葉で、ヘブル語の「シャローム」と同じですね。「シャローム」という言葉は「神の支配から来る心の平安」という意味の言葉が元の言葉です。神の支配があるところにだけ本当の平安があるわけですね。それは単に平和というのではないんです。人間のすべての幸福があなたと共にあるようにという意味の言葉なんです。でありますから「平和を作り出す、すべての幸福を来たらせる人、そういうことを生ぜしめ、もたらす。」「そういう人は神の祝福を受けるとこういうことですね。地上の息絶えた時に、私もは直ちに、いよいよ神の平安が与えられる幸せな神の王国に行くのであります。では地上に病人を放っておいていいか。病人が痛みで苦しんでいる。その病人を看護する、治療をする。或いは重症心身障害児を抱えて親たちが中心をしようかと苦しんでいる。そうい

う地上のあらゆる不幸、苦悩というものを取り外して幸福を持つて来る。そのために奮闘する人、平和を作り出す人、その人たちは神の祝福を受ける。私も地上に置かれる限りは、地上であらゆる努力をして生き、そういう人々のすべての幸せを作り出していくことを命じられておられる。彼らは「神の子と呼ばれるであらう。」「呼ばれる」は「カレオー」というギリシヤ語で、「名付けられる、あるいは招待する」という言葉で、神の子たちとして招待される、神の王国に招かれるのです。

十節、「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである。」「義」は「ディカイオスネイ」というギリシヤ語で、「意志」といって行動において神の意志に合致していること。実生活の隅々まで神の正しさの原理が及んでいること。」「そういう正しい生活をしよ」とするのために「迫害される」これは「追い払われる」という意味の言葉でもあります。のちにクリスチャンはそのために非常に苦勞するわけです。私もも実生活の中で本当に神の正しさを生き抜いていこうとすると至る所でぶつかるわけですね。「神の王国は彼らのものである。」「という言葉は、

現在動詞が使ってあって、神の王国は今すでにあなたのものであるということですね。この聖隷福祉事業団も三回追い出されてきて、ここで四回目、そして五年間ここであらゆる迫害を受けた。貧乏と迫害の中で過ごしましたけれども、ここには本当に神の王国がありましたね。ほとんどすべての人々がここで信仰をもって、そして洗礼を受け、天にいき、あるいは今も働いているわけです。主な人たちはみんなそういう人たちでした。

十一節、「わたしのために人々があなただがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたはさいわいである。」「この「悪口」という言葉は、「やくざな、不道徳な、邪悪な、やっかいな」とかいろいろな意味があります。これは「ポネロース」というギリシヤ語で、私どもに偽って、あの野郎はそういう悪い奴だということを書いて迫ってくるんですね。ここでもそういうことばかりでした。そういう時に怒る必要のないわけですね。主がそのこと仰っていらつしやる。善いことをして行こうとしますとね、本当に主に従って行こうとすると至る所でこれをやられる。そういうことがありましたら、ああ主が山上の垂訓

の中でちゃんと仰っていると考える方がいいわけですね。そういう時に喜びよるこべと。

十二節、「喜び、よろこべ」始めの「喜び」は「カイレイテ」というギリシヤ語で、「小躍りして喜ぶ」、欣喜雀躍、万歳という意味があるんです。あとの方の「よろこべ」、これは「ポールス」というギリシヤ語で、非常に大きな喜びを言うんです。偽って様々な悪口を言われたり、迫害された時には、躍り上がって喜べ、そうやって非常に喜べというんですね。なぜなら天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなた方より先の預言者たちも、同じように迫害され、同じように追つたわれたというわけですね。「預言者」、「プロフェテイス」というギリシヤ語です。この預言者という言葉は、「神の言葉を預かる、神の啓示を告げ、解き明かす者」という意味の言葉です。言ってみれば本当の神の言葉を伝える人たちもみんな同じように迫害された。様々な悪口を言われた。その時に本当に私も神の子たちとなるということですね。初代のキリスト教徒も聖隷の始めも何度もこういう形で非常にひどく迫害されました。迫害されたのにも、迫害されたのにはそれぞれの意味があったわけですね。